

旅寝の展開	6
旅のさまざま	12
庵をめぐって	19
ふたたび庵のこと	27
風流の笠	35
笠から傘へ	43
笠の二態	51
二様の春雨	58
晩年の春雨	65
金屏風一双	72
狐と狸	80
風におどろく	87
砧を枕に	94
それぞれの秋の暮	109
寂滅への薄暮	101



蕪村筆『奥の細道画卷』より「旅立ち」の図  
(逸翁美術館蔵)

芭蕉と蕪村の世界

秋の暮と鳥の風流	117
花の春	124
年内立春	130
春を惜しむ	136
郷愁の詩人	143
青葉若葉	150
短夜の旅情	157
夏野の風景	164
馬のいる風景	171
菖に寄せる二重奏	179
紅葉の世界	188
名月二つ	195
庭の風情	202
寒さの詩情	209
冬の旅立ち	217
あとがき	226



【新花摘】より蕪村像  
(柿衛文庫蔵)

## 旅寝の展開

芭蕉にとつての旅の意義は、『おくのほそ道』の冒頭に記されているところがよく知られているが、ここではその発句自体の中に旅の意識をさぐってみたい。芭蕉の句に〈旅〉の語が詠みこまれているものがある。といつても芭蕉の句にまず目立つのは〈旅寝〉である。

しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮	芭蕉	(野ざらし紀行)	貞享元年
たびねして我が句をしれや秋の風	同	(野ざらし画卷)	貞享年間
たび寐よし宿は師走の夕月夜	同	(熱田三歌仙)	貞享四年
旅寝してみしやうき世の煤はらひ	同	(笈の小文)	貞享四年
花の陰 謡に似たる旅ねかな	同	(曠野)	元禄元年
名月の見所問はん旅寐せむ	同	(荊口句帳)	元禄二年
病 鴈の夜さむに落ちて旅ねかな	同	(猿蓑)	元禄三年
夜着ひとつ祈り出だして旅寝かな	同	(真蹟懷紙)	元禄四年
都いでて神も旅寝の日数かな	同	(雨の日数)	元禄四年
高水に星も旅寝や岩の上	同	(真蹟懷紙)	元禄六年

と、たちどころにこれだけ拾うことができる。旅寝、旅寐、たびね、などと用字はまちまちながら、ともかく芭蕉がこの語を好んでいたことは間違いない。ほかにこんなにも多くの旅寝という語を使った俳人はいない。ちなみに蕪村には、旅寝の語を詠みこんだ句は一句もない。各句の下に作年次を記してみたが、それによると貞享以後、すなわち蕉風開眼以後にのみ旅寝の語を用いた句が見られることは注目されている。蕉風が確立するまでは、一句も見られない。旅寝の語と蕉風の確立は、深くかかわっているようである。

右の第一句へしにもせぬ旅寝の果よ秋の暮は、その注目すべき旅寝の初出例である、『野ざらし紀行』には、〈武蔵野を出づる時、野ざらしを心におもひて旅立ちければ〉と記した上でこの句を掲げて、冒頭部分にある、

野ざらしを心に風のしむ身かな 芭蕉

に照応するものであることを明らかにしている。すなわち、野に捨てられた髑髏となることを覚悟して秋風とともに旅立ったのだが、どうにか死ぬこともなく旅寝を続けて、いまその秋も終わろうとしている、の意である。つまりこの第一句の〈旅寝〉はなまやさしいものではない。死ぬかもしれぬという思いをかみしめながらの苦しい旅寝であった。第二句のへたびねして我が句をしれや秋の風は、中川濁子に清書させた『野ざらし紀行画卷』の自跋に見られ、この句の前には〈此の一卷は必ず記行の式にもあらず、ただ山橋野店の風景、一念一動を記すのみ、爰に中川氏濁子、丹青をして其形容を補はしむ。他見恥づべきものなり〉と書かれている。『野ざらし紀行』の旅の途中で